

効率的な英語授業の開発： 教材開発，科目間連携，協同学習による授業改善の実践

Development of the Effective English Lessons: Trials for Improving English Lessons through Development of Materials, Integrated Class and Cooperative Learning

大牛 英則・重迫 和美・MOSHER David・金野 伸雄・佐々木 淳・
CHAPMAN Damon・柳原里枝子
Hidenori OGYU, Kazumi SHIGESAKO, MOSHER David, Nobuo KANENO,
Jun SASAKI, CHAPMAN Damon and Rieko YANAGIHARA

キーワード：科目間連携・教材開発・協同学習
ベーシックコミュニケーションスキルⅠ，Ⅱ・英語リテラシー・英語Ⅰ

はじめに

社会の急速なグローバル化を背景に、国際共通語としての英語の重要性はますます高まっている。小学校での英語教科化や中等教育での英語運用能力を重視する教育課程の検討等、文部科学省が初等中等教育における英語教育改革を急進する中、大学における英語教育の在り方の見直しも必須である。本報告では、このような時代の潮流を背景に、平成27年度に行った比治山大学共同研究「効率的な英語授業の開発」による授業改善の試みを報告する。

改革の試みは主として、1. 教材開発、2. 科目間連携、3. 協同学習、4. 反転授業の4つの観点から、1年次必修の「英語リテラシー」（前期）及び「英語1」（後期）と、1年次選択の「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」（前期）及び「ベーシックコミュニケーションスキルⅡ」（後期）の4科目において行った。授業を行なうにあたって、全体を習熟度別に2つのクラスに分割した。「英語リテラシー」「英語1」の前期担当は柳原と重迫、後期は柳原と金野であった。「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」と「ベーシックコミュニケーションスキルⅡ」は前後期とも、ChapmanとMosherが担当した。上位クラスを柳原（前後期とも）とChapman（前後期とも）が、下位クラスを重迫（前期のみ）及び金野（後期のみ）とMosher（前後期とも）が担当した。本研究に係る学習成果の測定と分析を大牛と佐々木が行った。

「科目間連携」は、「英語リテラシー」および「英語Ⅰ」と、「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」及び「ベーシックコミュニケーションスキルⅡ」で行った。「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」と「ベーシックコミュニケーションスキルⅡ」で練習した会話表現を、「英語リテラシー」と「英語Ⅰ」の中で英文法の観点から整理し、全体としては「会話表現の修得」と「使うための英語の文法知識の修得」を図った。

「教材開発」および「協同学習」は重迫、柳原の「英語リテラシー」で行った。

平成27年度 科目間連携

(前期)	ベーシックコミュニケーションスキルⅠ	英語リテラシー
(後期)	ベーシックコミュニケーションスキルⅡ	英語（基礎）Ⅰ

連携 1

ベーシックコミュニケーションスキル I	(Chapman)	英語リテラシー	(柳原)
ベーシックコミュニケーションスキル II		英語 I	

連携 2

ベーシックコミュニケーションスキル I	(Mosher)	英語リテラシー	(重迫)
ベーシックコミュニケーションスキル II		英語基礎 I	

第一章は本実践の核となる「ベーシックコミュニケーションスキル I および II」の授業の報告を、第二章は「英語リテラシー」および「英語 I」の授業について、4つの観点からどのような工夫を行ったかを報告する。第三章は、英語客観テストから見る学習効果について報告する。最後に、結論として、本取組から見えてきた英語教育の課題を述べ、その解決策を提言する。

第一章「ベーシックコミュニケーションスキル I および II」実施授業報告

第一節「ベーシックコミュニケーションスキル I」

Twenty-eight students enrolled in my section of Basic Communication Skills I in the spring semester, and twenty-three students enrolled in Basic Communication Skills II in the fall semester.

In the spring semester, sixteen classes were conducted including the final class held during examination week. This class was linked to Shigesako's English Literacy class. Selected grammar structures from the Conversations in Class were also taught in her class. The major content and type of activity of each class is outlined below.

Week 1. This was a joint session done with Damon Chapman. We did get acquainted activities and went over class rules regarding attendance, tests, dictionary requirement, etcetera.

Weeks 2-4. Students were introduced to textbook activity types through short exercises and pair work as well as to the three Golden Rules for English conversation: (1) avoid silence when asked a question; (2) give answers with one or two extra pieces of information; and, (3) sometimes talk about yourself without being asked a question. They taught each other these rules, in part, by reading Japanese explanations to each other.

Weeks 5-8. During these four weeks, students learned first time greetings, self-introductions, and how to talk about school life and part-time jobs. They engaged in frequent pair work and small group work to practice the sentence patterns, vocabulary and conversation strategies learned in the unit. Students also taught each other vocabulary they had learned as preparation for the unit vocabulary quiz.

Weeks 9-13. In these five weeks, students learned English for talking about daily activities, school life and how they spend time studying, working and at play. Handouts were used to give extra, more controlled pair and group work practice. In the final week, students were tested in small-group speaking tests on their ability to follow the first two Golden Rules and to use conversation strategies for expressing

uncertainty, getting time to think, asking for repetition, say they do not understand getting help from the teacher.

Weeks 14-16. In week fourteen, students took a unit two vocabulary quiz and began preparing for a second speaking test, a pair test in which they asked each other five questions from unit two and were assessed on the ability follow the Golden Rules and use the strategies learned in class. The next week, students practiced in pairs for their speaking test and prepared for a unit one and two vocabulary test. In week sixteen, students took the vocabulary test, the speaking test and turned in their vocabulary journals.

In the fall semester, there were also sixteen classes including the final class held during examination week. The major content and type of activity of each class is outlined below. The class was linked to Kaneno's English one. Cooperation consisted of occasionally sharing information about lesson content by email.

第二節 「ベーシックコミュニケーションスキルⅡ」

Week 1. The instructor gave an overview of the class including grading information and class rules. Common greetings were reviewed as part of a short conversation exercise.

Weeks 2-8. In these weeks, students learn how to talk about attractions in their hometowns, mainly Hiroshima City and the surrounding area. There was an emphasis on frequent in-class vocabulary study, dictionary use and vocabulary sharing in pairs and small groups. As in the spring, guided conversation practice handouts were used for ample pair and group work in which students helped each other master basic sentences and expressions taught in class. Both pair work and vocabulary provided an element of reverse teaching. In week eight, there was a unit three vocabulary quiz and the first speaking test was set up.

Weeks 9-12. In week nine, the students first quizzed each other on silence avoidance strategies using A-B pair cards: one student acted as teacher, the other as student. They then did a brief one-on-one speaking test with the teacher in which they had to use silence avoidance strategies and give a long answer to one question. In the remaining weeks, students completed unit three, took two short vocabulary quizzes and a small group speaking test in which they each cooperated to maintain a conversation for two minutes each that keep Golden Rules one and two the conversational strategies learned in the spring and new strategies for polite expression of agreement and disagreement.

Weeks 13-15. Students learned to talk about their travel experiences and future travel ideas using handouts and unit four of the textbook. Students frequently worked and pairs and small groups to practice and master the structures and vocabulary. In week fifteen, there was a unit four vocabulary quiz.

Week 16. A final vocabulary and expressions test and speaking test were conducted and students submitted their vocabulary journals.

第二章「英語リテラシー」および「英語Ⅰ」実施授業報告

第一節「英語リテラシー」柳原担当

本クラスの学生は、習熟度別にクラス分けをする目的で事前に実施されたプレイスメントテストの結果、上位レベルに属した31名であった。大多数が積極的にコミュニケーション活動などを通して授業に参加する一方、若干名の学生は学習意欲が低く、個別に注意を払ったり指導したりする必要があった。

本授業は高校までに習った英語知識の復習と表現の手段としての英語習得を目的としていることから、使用テキストは基礎固めと実践的な英語学習が可能である『**Make It Simple***（メイク・イット・シンプル）—基礎からの実践英語—』（三修社）を使用した。前期15回の授業で取り上げ、テキストに沿って特に重点を置いた復習文法項目は、「be動詞」、「一般動詞」、「前置詞（前置詞句）」、「代名詞」、「命令文」、「名詞（形容詞・前置詞句を含んだ名詞句）」であった。

本授業においては、共同研究の4つの観点のうち、科目間連携、協同学習、教材開発における授業開発を実践した。Chapman担当の“ベーシックコミュニケーションスキル s I (BCS)”との科目間連携に関しては、授業後にそれぞれの授業で行った活動内容やテキストの進み具合などを報告し合った。また学生の様子や次回の授業内容などについても連絡を取り合いながら連携を図った。授業の形式としては、本授業のテキストをもとに「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」の4技能を使った活動を行い、それぞれの活動の中に「BCS」の授業で使用された表現を織り込むことを心掛けた。また、BCSのテキストで使用されたモデル対話文を使って学生同士のペアでスピーキング練習をし、本授業で学習した表現を“follow-up questions”として学生が自由にその対話文に加えていく活動を取り入れた。協同学習は、主に学生同士のペアによる会話練習や、学生Aと学生Bに分かれてインフォメーション・ギャップ形式の活動をする際に取り入れられた。教材開発面では、テキストで出てくる文法項目の補足的な説明をするためのハンドアウトを作成し、BCSとの相互作用を図るためにQUIZを用いた。下記は名詞句を学習した際に使用したQUIZの一例である。

〈QUIZ（名詞句）の例〉

英語リテラシー× BCS — 名詞句 —

QUIZ 次の文中の名詞句を探して下線を引いてみよう。さらに、その下線部の品詞がそれぞれ何かを答えてみよう。

〈BCS で使われた表現より〉

- ① What's your hometown famous for ?
- ② I like delicious food!
- ③ I love pro baseball.
- ④ My hometown is famous for Himeji castle.
- ⑤ Do you like living there?

科目間連携においては、学生の反応は相互作用によってより理解できるようになったと見受けら

れたが、一方で授業者としては、異なる観点によって作成された2科目のテキスト間で連携・相互性を持たせることに難しさを感じた。「英語リテラシー」で使用したテキスト『メイク・イット・シンプル』は基礎総合英語、「BCS」で使用されたテキスト“Conversations in Class”は会話によるコミュニケーションに特化したテキストであるため、今後はより相互性が高く、連携の取りやすい教材選びが必要であると考えられる。協同学習面では、少人数での活動は多く取り入れられたもののグループ学習の機会が十分ではなかったため、さらなる協同学習の場を広げる工夫が課題である。また、教材開発に関しては学生の理解を深め、2科目の相互作用を高めるために、前述したようなそれぞれのテキスト間の大差を埋めるべく独自の補足的資料が不可欠である。

第二節「英語リテラシー」重迫担当

重迫担当「英語リテラシー」クラスの人数は30名で、下位レベルの学生が振り分けられた。本授業の目標は「英語を日常生活で使うための英文法知識の習得」である。基礎的な英文法の授業ではあるが、Mosher担当「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」との連携科目であるため、「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」で使用する英会話の教科書（Conversations in Class）を用い、本授業固有の英文法に特化した教科書は使わなかった。

*Conversations in Class*の前期学習範囲（41頁まで）から摘出し、本授業で取り上げた文法項目を、取り上げた順に挙げると、「動詞の種類（1）be動詞と一般動詞」、「疑問文の作り方：closedとopen」、「5文型」、「品詞：名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞」、「準動詞：to不定詞、分詞、動名詞」、「動詞の種類（2）状態動詞と動作動詞」、「時制：現在形と現在進行形、過去形と現在完了形」である。

本授業は、共同研究の4つの観点のうち、科目間連携、協同学習、教材開発の3点について工夫を試みた。科目間連携面では、火曜日に行われるMosher担当「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」を参観するなどして授業内容を把握し、金曜日に行う授業を計画するようにした。火曜日の授業で学習したモデル文に学習者が金曜日にも必ず触れるようにして、モデル文が学習者の記憶に定着するよう図った。授業参観によって、授業内容の連携強化が図られるばかりか、学習者の志向や態度を観察する機会が得られ、筆者の授業で学習者に接する際の参考になった。

協同学習は、全体を学生番号順に7人から8人の4グループに分けて行った。スチューデントアシスタント2名、助手1名、教員（重迫）1名、合計4名の教授スタッフが各グループの協同学習を支援した。学習は、英会話教材の会話文から文法的ルールを発見させることを重視した。例えば、十数個の疑問文に注目させ、肯定文を疑問文に変化させるルールをグループ毎に発見させるのである。授業後半にグループ毎に発見を用紙にまとめさせ、授業終了時に提出させた。

教材開発の準備段階として、学習到達目標を「日常的な会話を行うことができる」と設定した場合、どのような文法項目を、どのような順番で教えたらいかがを検討した。結果取り上げた文法項目は、既述の通りである。通例英文法書で扱われる文法知識と、英会話教材で必要とされる文法知識とは必ずしも一致しない。5文型について言えば、英文法書では第一文型から第五文型までを順番におおよそ均等の分量を充てて教えるが、会話教材においては第三文型までの使用頻度が高い。また、動名詞やto不定詞の名詞的用法について言えば、英文法書では主語、目的語、補語の順におおよそ均等の分量を充てて教えるが、会話教材では目的語として使われる頻度が高く、主語として使われる文例を探すのは至難の技である。そこで、毎行なう小テストで、日常生活でよく使われる文法知識に関わる出題割合を高くして、学習者にそれらを強く印象づけるように工夫した。

毎学期比治山大学で実施される授業評価アンケートの結果は、全体的満足度が5点満点中4.11

点で、高評価だったと言えよう。特に、グループ毎の協同学習は好評だった。今後の課題として、科目間連携を視野に入れた教材開発が急務である。今回の共同研究では、「ベーシックコミュニケーションスキルⅠ」を筆者が参観するのが授業運営の鍵となったが、他の公務等の関係で毎週参観することができなかつたし、時間割の都合で毎年参観できるとも限らないからである。

第三節「英語Ⅰ」柳原担当

後期「英語Ⅰ」の履修者は前期「英語リテラシー」の履修者と同様で、年度当初のプレイスメントテスト結果における上位31名であった。前期の学生観と比較すると、学生同士の人間関係が築かれて親しみやすい雰囲気が徐々に出てきた印象を受けた。本授業は「英語リテラシー」に引き続き英文法の基礎知識を高める位置づけであることから、使用テキストは前期に引き続き『Make It Simple (メイク・イット・シンプル) —基礎からの実践英語—』(三修社)を使用した。後期の授業内で特に重点的に学習した文法項目は、「疑問文(疑問詞+動詞, 疑問詞+形容詞/名詞)」、「時の表現」、「助動詞」、「比較級」、「最上級」であった。

後期も共同研究の4つの観点のうち、科目間連携、協同学習、教材開発の3点の授業開発を試みた。科目間連携は前期同様、Chapman担当の“ベーシックコミュニケーションスキルⅡ(BCS)”と連携授業を行い、BCSのテキストで使用された表現を文法的に分析したり、解説したりした。特に、学生がBCSで練習した表現を文法と一緒にチャンクとして覚えられるよう心掛けた。協同学習に関しては、毎回ペア活動が欠かせず、ペア・リーディング、ロールプレイ、ジグソー・リスニングなどを行った。また教材開発の側面では「英語Ⅰ」で学習する文法項目を説明するハンドアウトを作成し、BCSで学んだ表現をフレーズとして覚えさせたり、QUIZ形式のハンドアウトを使用したりして定着を図った。下に示したハンドアウトの一部は、BCSの教材で使われた表現との相互理解のために出題されたQUIZの例である。

〈QUIZ(疑問詞+形容詞(副詞)/名詞)の例〉

英語リテラシー× BCS —疑問詞+形容詞(副詞)/名詞—

(BCSテキストUnit 5, 6, 7より)

QUIZ () に適切な語を入れよう。

1. 食べるのにどのくらい時間がかかりますか?

How () does it take you to eat ?

2. どんなピザが好きですか?

What () of pizza do you like ?

3. どのくらいの頻度でカラオケに行きますか?

How () do you go to karaoke ?

4. 普段何の歌を歌いますか?

What () do you usually sing ?

5. 将来どのような趣味をしてみたいですか?

What () would you like to do someday ?

さらに後期に工夫した点は、BCS担当のChapmanと定期試験の問題に互いの科目の学習内容を組み込んだ点である。ポイントを絞ったため正答率も高く、科目間共通の問題を取り入れたことは学習効果をはかる上でも意義があったと考えられる。

科目間連携を通して明らかになった点は、両科目の担当者が独自の科目目標に加え、シラバス作成や教材選択の時点から科目間連携としての共通の目標と授業計画をさらに緻密化し、明確にする必要があるという点である。今後はシラバスや授業におけるオリエンテーションなどにおいて、学生へも両科目の共通目標を明示することが望ましい。協同学習における気付きは、学生が個人でできない活動は他の学生ともうまくできない傾向が強いという点である。したがって、協同学習の前に、学生個人の学習意欲や英語に対する自信を高める必要があると感じた。本クラスは上位クラスであるとはいえども依然として英語が苦手な学生も多いため、「やればできる」という達成感をもたせつつ学習意欲を高め、基礎英語力の定着を図っていきたい。教材開発面では、「英語Ⅰ」における高校英語の文法復習を目的として使用される英語表現や学習項目と、BCSのスピーキング・コミュニケーションを目的とした教材設定における英語使用との違いが大きく、両科目共通の教材開発が必須であると感じた。前述のとおり、科目間連携の枠組みとより幅広い協同学習のための学生一人ひとりの学習意欲向上の2点を見据えた上で、今後はより機能的な教材開発が課題となるであろう。

第三章 学習成果

「ベーシックコミュニケーションスキルⅠおよびⅡ」は言語文化学科1年生対象の言語文化共通科目（選択）、「英語リテラシー」および「英語（基礎）Ⅰ」は現代文化学部共通教育科目（必修）である。「英語リテラシー」および「英語（基礎）Ⅰ」は入学年度当初に実施されるプレースメントテスト（「英語能力判定テスト」英検協会）の結果をもとに習熟度別クラス編成をすることになっている。そこで、本研究に係る学習成果をプレースメントテストの結果（113名）をもって概観することにする。

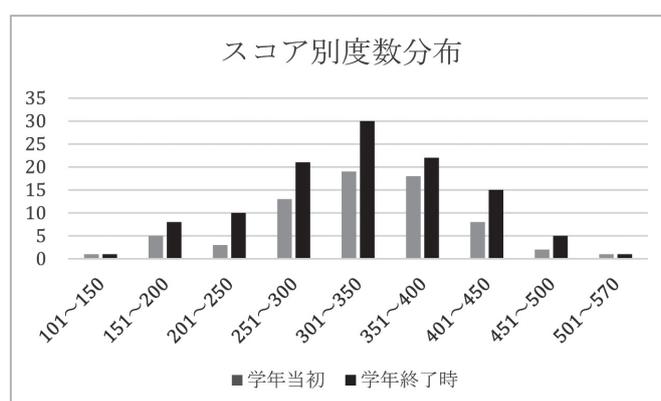
第一節 スコア別度数分布

	101～150	151～200	201～250	251～300	301～350	351～400	401～450	451～500	501～570	未受験
学年当初	1	5	3	13	19	18	8	2	1	43
学年終了時	1	8	10	21	30	22	15	5	1	0

本テストは、570点満点（listeningを除く）である。上のスコア別度数分布をみると、学年当初4月に実施したものと学年終了時に実施したものの度数分布はほぼ同じような正規曲線である。学年当初の度数がどの得点帯においても低いのは未受験者が43名いるからであると考えられる。

一番度数の多い得点帯（301～350）は「英検3級レベルの実力」であるとされる。「英検3級レベル」は中学校の教育課程修了程度の英語力である。高等学校修了程度の英語力とされるのは英検2級レベルであるとされている。本学ではこれに該当する英語力をもつ学生は1名である。つまり約半数の学生については中学卒業程度の英語力はあるものの高等学校卒業程度の英語力までは至っていないといえることができる。

さらに約半数の学生は中学卒業程度の英語力が身に付いていないという現状も診ることができる。



第二節 スコア増減分布

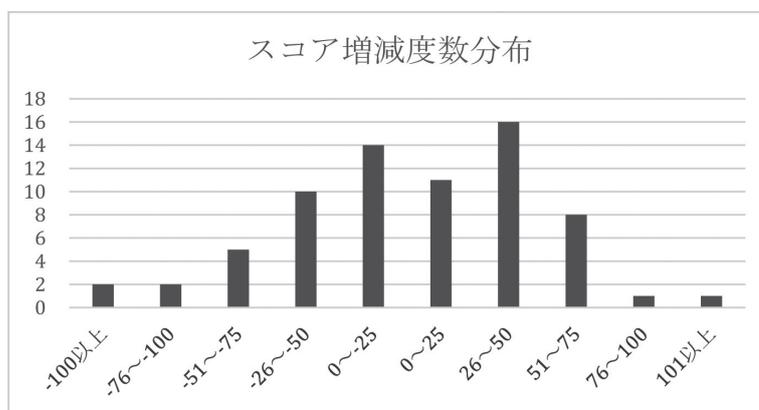
次に1年間の英語学習を通して、英語の力の伸長はどうであるかを見ることにする。

-100 以上	-76～ -100	-51～ -75	-26～ -50	0～ -25	0～25	26～50	51～75	76～100	101以上
2	2	5	10	14	11	16	8	1	1
2	7		24		27		9		1

上の結果を見ると、2回のプレイスメントテストを受験した学生70名中スコアを伸ばした者は37名、逆にスコアを減少させた者は33名である。このことから、1年間の英語学習に一定の効果があつた結果スコアを伸ばした可能性があるのは約50%であり、残りの約50%の学生には学習効果が認められなかったばかりか、残念なことに、何らかの要因でマイナス効果があつたと考えることができる。

おわりに

これまで2年間にわたって比治山大学共同研究「効率的な英語授業の開発」における国際コミュニケーションコースの授業実践を報告してきた。授業開発の視点として、平成26年度(1年次)は科目間連携、協同学習、反転授業を、平成27年度(2年次)は科目間連携、教材開発、協同学習に焦点を当てて取り組んだ。



今回の科目間連携を軸にした協同学習、教材開発の取り組みを通して、当初期待していたような大きな成果を見ることはできなかった。この点について何が原因であるかを特定するために継続して調査・研究する必要がある。

原因究明の視点として1) 授業内容に基づく緻密な連携計画をたてる、2) 連携計画をもとに適切な教材を選定する、3) 連携する授業者がそれぞれの授業において感じた課題を共有し、明確な解決策を講じることが必要である。

さらに、授業を改善し期待する学習効果を得るためには、先に挙げた3つの視点だけではなく学生の授業に対する姿勢の改善、学習規律の確立、学習意欲の向上、授業外学習時間の確保等、総合的に改善していく必要があることも忘れてはならない。

今後も継続して、授業改善に努めていかななくてはならない。

参考文献

Talandis, Jerry Jr., and Bruno Vannieu. *Conversations in Class: A Conversation Textbook for Japanese University Students* Alma Publishing, 2015.

森田和子・高橋順子・北本洋子(2015)『メイク・イット・シンプル ―基礎からの実践英語―』三修社.